

平和のバトンを引き継ぐ

ランナー

中学生が取り組んだ、戦争体験者からの聞き取り調査

東松山市立松山中学校 沖田 晴美

1 ねらい

昨年は、戦後70年目という節目の年に当たり、国内外からも大きな注目を集めました。そのうえ、「安保関連法案（戦争法案）」が活発に国会で議論されている最中でもありました。そこで、私は中学生を教育する社会科教師として、このような歴史的節目の年に何ができるだろうかと考えました。その結果、少なくなっていく「戦争体験者の生の声を聞く」活動に取り組ませることを考えつきました。今こそ平和のバトンを引き継ぐランナーを育てる教育が求められている時はないと思っただからです。

2 取り組み方

これまでも学期の途中で取り組んだこと

はありましたが、十分な全員の取り組みにならず、取り組める人は取り組んでみようという何人かの取り組みに終わっていました。

そこで、

1 夏休みの必修課題にすることで、全員が何らかの形で取り組めるように工夫をしました。また、時間的にゆとりをもつて取り組めるようにしました。

2 身近に体験を話せる人がいない場合は、各地で主催する戦争体験を聞く会などへの参加を勧めました。そこで幾つかの例を紹介しました。

3 取り組み方法と取材用紙の一体となったものを事前に配布し、やり方の説明をして取り組みせました。

3 まとめ方

1 個人新聞の形式を選びました。枠を設け、レイアウトのアドバイスを与えて取り組みやすいようにしました。

2 2学期の最初の授業の2時間を計画に当てましたが、終わらない生徒もいたので宿題としました。

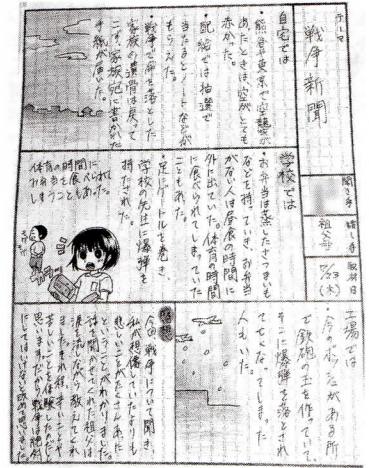
3 作品をラシヤ紙に張り、クラスの廊下に掲示しました。そして、9月の学校祭に間に合わせ来場者の目に触れるようにしました。また、11月の三者面談でも掲示し、できるだけ多くの保護者の目に触れるようにしました。長期間にわたり掲示するにあたり、学年職員の理解と協力を得るよう合意形成を図りました。

4 作品の中から

右の作者のAさんは、祖父母からの体験談を自宅、学校、工場の3つの角度からまとめました。

自宅編では、熊谷や東京大空襲の様子、戦死者の遺骨は帰らなかったことを聞きました。

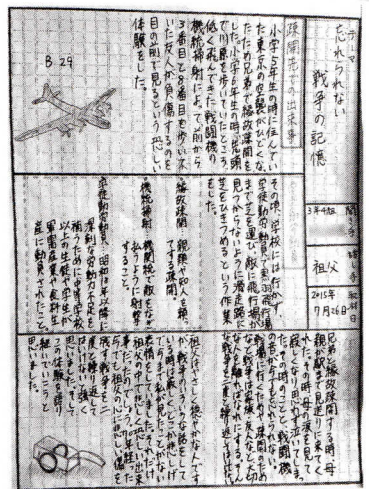
学校編では、お弁当を体育の時間に食べられてしまったことやお弁当がない人は昼食の時間に外に出ていた話を聞いていま



Aさん



Bさん



Cさん

た。

工場編では、鉄砲の玉を作っていたところに爆弾を落とされ犠牲者が出る話を聞いていました。

こうした話を祖父は、Aさんに涙を流しながら語りました。Aさんは祖父の思いに自分の思いを重ね、「戦争は絶対にしてはならない」と改めて決意をするのでした。

また、戦争一色に染められた生活を聞き、テーマを「戦争新聞」としたのではないかと想像できました。

Bさんは、94歳になる曾祖母から曾祖父の元に届いた赤紙の体験談をまとめました。

まだ結ばれたばかりの若い夫婦の元に届いた赤紙は、二人を引き裂くだけではなく、もしかしたらこの世にBさん自身も生を授けられなかったかもしれない過酷なものだった。

たことを感じ取りました。

幸いにもすぐに終戦を迎えることができたため、生還することができました。しかし、そのことを話す大好きな曾祖母の表情が、僅かに歪むことに気づいた瞬間、Bさんは戦争の傷跡の深さを強く感じます。そして、悲しい戦争は二度と起こしてほしくないという心から願うのでした。

Cさんは、祖父の小学校6年生の頃の疎開先での体験談をまとめました。

ある日集団登校で川原を歩いていたら、祖父は3番目と8番目の友人が戦闘機の機銃掃射によって目の前で負傷するという出来事に遭遇し強い恐怖を覚えます。

また祖父は、学校へ行かず学徒勤労動員で働く話や疎開に行く際に見送りの母が見せた涙と戦闘機の音が、今でも忘れられない。

いと語ります。そして、家族や友人など大切な人を引き裂く戦争は、二度と繰り返してはいけなく強く叫びます。

Cさんは、普段は優しく穏やかな祖父が、戦争の話をする時に今まで見せたこともない厳しく悲しい表情を見せることに驚きます。

そして、戦争が人の心にもたらす深い傷を感じています。そして、このような戦争を二度と繰り返してはいけないと思うと同時にこの戦争体験を語り継いでいかなければならないと使命感に燃えていきます。

Dさんは、91歳の祖父からの体験談をまとめました。

戦地に派兵された祖父の目撃したことは、上官の命令で民間人を「肝試し」と称し銃剣で刺すように命じられる部下が、で

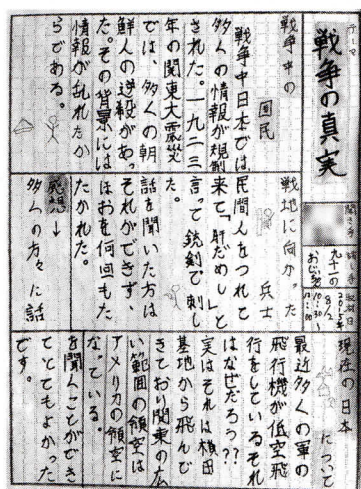
きずに頬を何回も叩かれる様子でした。

また現在の日本についても考察していきます。最近多くの輸送機が低空飛行をしていることに疑問を抱き、それが横田基地から飛んで来ることを知ります。そして関東の広い範囲が米軍の飛行経路になっていることに気付いていきます。Dさんは、それを「アメリカの領空になっている」と指摘をします。

そうしたことが、あまりに強い衝撃だったのではないのでしょうか。テーマを「戦争の真実」としています。

Eさんは、祖母の妹夫婦（91歳と95歳）のシベリア抑留の過酷な体験談をまとめました。

私は、最初にテーマが「戦後68年」と書かれてあるのを見て、「おや？」と怪訝に

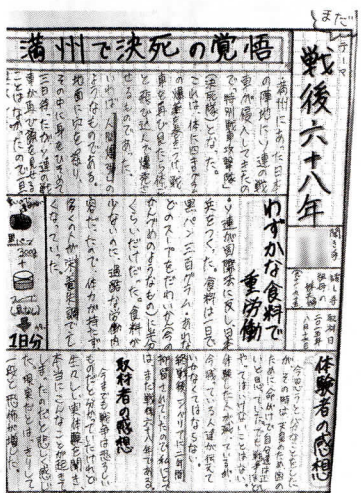


Dさん

思いました。しかし、やがてその謎は解けました。その理由は、終戦後シベリアに2年間抑留されていたためでした。祖母の妹夫婦にとっては、まだ戦後68年であるというわけでした。なるほどと合点がいきました。

また、体に4kgの爆弾を巻き付け戦車に向かつて飛び込む作戦や少しの食糧しか与えられず重労働を課せられ栄養失調で亡くなっていた話は、Eさんの心に戦争の恐怖を一層増すものとなって焼き付けられました。

祖母の妹夫婦は、「今思うとバカなことをしたと思うが、当時は天皇のため国のために命がけで正しいと思っていた。でも戦争ほどやっではないけないことはない」と語ります。そして「生き残っている人が伝え



Eさん

なくてはいけない」と使命感を語ります。

残念ながら、この時のEさんは、祖母の妹夫婦の思いに伝えていません。これらの生々しい体験談を聞き現実のことと知ると、悲しみと恐怖が一段と増したと結んで終わっています。今後どのようにEさんが成長していくか、注目していきたいと思えます。

5 取り組みから 見えてきたもの

一人ひとりの生徒の感想を読むと、戦争体験者の生の声を聞くことの効果の大きさがひしひしと伝わって来ました。教師の私が語るより、何倍もの効果があると思えました。それだけでもやった価値を感じました。

特に祖父母から聞いている生徒は、血の繋がった存在から聞いたことにより、自分の強い運命を感じています。そして、改めて祖父母の人生を考える良い機会になっています。また、祖父母にとっても孫に自分の人生を語るにより、孫との絆を深める機会になったと思います。祖父母から孫に戦争の悲惨さと平和の尊さ、命の尊さというバトンを渡す歴史的瞬間をつくる取り組みになったと思います。